

「サラとハガル」（創世記二六章一〜一六節）

1 サラの提案

創世記第一六章をいまお読みしました。アブラハム物語の一部です。ただ、この箇所が目立っているのは、二人の女性です。すなわち、サラとハガルです。じつさいこの章はこう始まっています。

アブラムの妻サライには、子供が生まれなかった。彼女には、ハガルというエジプト人の女奴隷がいた（一節）。

サライは後に神によってサラと呼ばれます。アブラハムとはすでにカルデアのウルの時代に結婚し、彼の妻として、ユーフラテス河畔のハラシへ、更にここカナシへと、夫と歩みを共にしてきた女性です。聖書によれば、アブラハムより十歳若く、じつは腹違いの妹でした。

ハガルという女性も、ここにあるように、エジプト人の女奴隷です。当時、嫁入りのさい、身の回りの世話をする若い女性を連れて行く、親がそれをつけてやるという習慣があったようです。ただ彼女はエジプト人で、しかも若く、サラの結婚当初からいたとは考えられません。途中から、サラの召し使いになったと思われる。一家に仕える奴隷ではなく主人はあくまでサラです。ハガルを、生かすも殺すも、どうにもできるのはサラだけでした。

サラはこのとき七五歳ぐらいです。アブラハムと長く連れ添ってきて、苦勞を共にしてきて、何がアブラハムの、したがって自分の、つまり二人にとって問題なのかはよく知っていました。それは彼女に子供が生まれなかった、不妊であった（一一・三〇）ことです。

振り返って見れば、アブラハムは、神の召しによってユーフラテス河畔ハラシを立つとき、あなたを地上のすべての民の「祝福の源」（一二・一〜三）とするとの託宣を受けています。カナシに着いて主なる神が彼に現れ、最初に語った言葉は「あなたの子孫にこの土地を与える」（一二・七）というものでした。そして先週私どもは第一五章で、奴隷のエリエゼルを養子にして跡を継がせるつもりでいたアブラハムに對して、その人ではなく、「あなたから生まれる者が跡を継ぐ」（一五・四）という言葉をあらためて聞いています。奴隷だろうが誰だろうが、養子ではダメで、実の子が跡を継ぐというのです。実の子が生まれないのに、十年の間にこれだけのことを言われてきて、しかももともと子供を産める歳でもない。その可能性は年ごとにへって行く。二人とも望みをもちつづけるどころか、とくにサラは、むしろ追い込まれていったというのが、実際ではなかったかと思えます。

ついにサラは、今日の聖書箇所が伝えているように、最後の手立てに訴えることをしたのです。ハガルを夫の側女（そばめ）とし、いわば代理をさせて、自分の子を得ようとしたのです。

サライはアブラムに言った。「主はわたしに子供を授けてくださいません。どうぞ、わたしの女奴隷のところに入ってください。わたしは彼女によって、子供を与えられるかもしれません」。アブラムは、サライの願いを聞き入れた。アブラムの妻サライは、エジプト人の女奴隷ハガルを連れてきて、夫アブラムの側女とした(二〜三節)。

サラの行動を、法という物差しでも、道徳という物差しでも、裁くことはできません。なぜなら、自分の召し使いによつて子を得ることは、その時代、違法でも、不道徳でもなかったからです。旧約聖書自身に、そうして子供が生まれることを妻の「膝の上」(三〇・三)で生まれるという言い方があるのです。

アブラハムとサラとの間にどういいう会話がなされたか、分かりませんが、アブラハムも同意します。

しかしこの箇所を読んで、何か納得できないものを感じるのは、きっと私だけではないと思います。何かもやもやしたもの、それは何なのだろう。私が思ったのはこうです。サラは、ここで、「主はわたしに子供を授けてくださいません」と言っています。ある意味で非常に信心深い言葉です。何ごとも、自分の人生に起こることはみな神の御心なしには起こらない、そういう意味を、この言葉は含んでいるように思われるからです。しかしそれだけでないものを私どもは感ぜざるを得ないのです。簡単に言えば、それは、神に対するサラの不満の表明なのです。十年間待った。でも何の答えもなかった。いまだどんな手段をとろうが、それは仕方のないことですよ！ サラの提案が、隠し持った神への不満から出たものなら、それがどんなに合法的でも、よい結果は得られない、祝福されない、そう思うのです。

2 帰結

果たして、女奴隷ハガルは身ごもります。それはサラにとっても本当は子供を得られるという希望に近づく朗報であったはずなのに、事態はまったく別方向に、こういうのを修羅場というのでしょうか、進展していきます。

アブラムはハガルのところに入り、彼女は身ごもった。ところが、自分が身ごもったのを知ると、彼女は女主人を軽んじた。サライはアブラムに言った。「わたしが不当な目に遭ったのは、あなたのせいです。女奴隷をあなたのふところを与えたのはわたしなのに、彼女は自分が身ごもったのを知ると、わたしを軽んじるようになりました。主がわたしとあなたとの間を裁かれますように」。アブラムはサライに答えた。「あなたの女奴隷はあなたのものだ。好きなようにするがいい」。サライは彼女につらく当たったので、彼女はサライのもとから逃げた(四〜六節)。

第一三章で、私どもは、争い、諍いのことを耳にしています。アブラハムの羊を飼う人たちと、甥ロトの羊を飼う人たちとの間の争いです。間違はなく男たちと男たちとの争いでした。

今日の箇所が記しているのは、まずは女と女との間の争いです。もちろん、こういう状況なら、妻と側女との間に、必ずそうしたことが起こるに決まっているというわけではありません。アブラハムの孫に当たるヤコブの場合も、妻ラケルが不妊で、彼はラケルの召し使いビルハによって子を得ています（三〇章を見よ）。しかしラケルとビルハの間に、サラとハガルの間に起こったようなことがあったとは書いてありません。書いてないからなかったとは言えないでしょうけれど。

サラには悔しさ、嫉妬があったでしょう。ハガルには、サラを文字通り軽んじる思いが、行動にも言葉にも、端々に出てきたのです。母親としての自然な誇りでしょうか（？）、しかしそれはサラをいっそう傷つけることになったのです。

もう一つの争いも発生しています。男と女との間、アブラハムとサラとの間の、もしかしたら聖書における最初の夫婦げんかでしょうか。確かに夫婦げんかですが、サラは悔しさを抑えて、問題を、個人間のそれではなく、家の秩序、正しい秩序が崩れていることとして提起しています。その結果私が不当な目に遭っている、それは「あなたのせいです」と。そしてその秩序を回復できるのは、家長たるあなたしかいないというのです。というのも、ハガルはかつてサラのものであったけれど、いまはアブラハムに属するからです。私どもならどうするでしょうか。

アブラハムがサラをなだめる？ それともハガルを呼んで言い聞かせる？ しかしアブラハムのはしたことは、ハガルをサラの手に戻すということ、責任を降りることでした。「あなたの女奴隷はあなたのものだ。好きなようにするがいい」。男のずるさがあります。こうして、十分予想されたことですが、サラがハガルにつらく当たります。アブラハムも容認したのです。彼もサラも一緒になってハガルを苦しめることに道を開いたと言わざるをえないのです。これが、アブラハムにサラがした提案の帰結でした。

3 願みてくださる神

女主人サラからつらく当たられ、家のすべてを仕切っているアブラハムからも見捨てられ、ハガルは逃亡します。

サライは彼女につらく当たったので、彼女はサライのもとから逃げた。主の御使いが荒れ野の泉のほとり、シウル街道に沿う泉のほとりで彼女と出会って、言った。「サライの女奴隷ハガルよ。あなたはどこから来て、どこへ行こうとしているのか」。「女主人サライのもとから逃げているところですよ」と答えると、主の御使いは行った。「女主人のもとへ帰り、従順に仕えなさい」。主の御使いは更に言った。「わたしは、あなたの子孫を数えきれないほど多く増やす」。主の御使いはまた言った。「今、あなたは身ごもっている。やがてあなたは男の子を産む。その子をイシュマエルと名付けなさい。主があなたの悩みをお聞きになられたから・・・」（六〇一節）。

サラにもアブラハムにも捨てられたハガル、しかし主なる神はハガルに目をとめ守られたのです。

改めて振り返って見ると、この一六章の前半、サラとアブラハムが、いろいろ話し合い相談しているとき、そこに主なる神はまったく関わることはありませんでした。主という言葉はあっても、ただサラの言葉の中で、形の上で出てくる(二、五節)にすぎません。そしてそれとは対照的に、この章の後半で、主は、ハガルに出会い、語りかけ、命令し、祝福を語るのです。私はこう思います。女奴隷によって子供を得ようとしたサラとアブラハムの企ては神様の御心になわなかったことなのだ、そう思います。といっても、祝福の源、祝福の基として立てられたアブラハムの立場にいささかも変化はありません。主はアブラハムを選び、召し、神の民の基となそうとしています。

やはり二人は待てなかったのです。気持ちには分かります。神様がああまでおっしゃっているのだ、でも、われわれの現状はこうだ、神様に恥をかかせるわけには行かない。それなら、許された人間的な手段で、それを実現しよう。でもそれは御心になわなかったのです。

むしろ神はアブラハムとサラの犯した間違いの尻拭いをしてくださったようにも見えます。アブラハムとサラによってハガルは、いまの言葉で言えば人権が損なわれ、苦しめられます。しかし神はハガルの立場に立って、立場の弱いハガルのところにまで来て彼女を守ってくださいだったので。

ハガルは自分に語りかけた主の御名を呼んで、「あなたこそエル・ロイ(わたしを顧みられる神)です」と言った。それは、彼女が、「神がわたしを顧みられた後もなお、わたしはここで見続けていたではないか」と言ったからである(一三節)。

ハガルは「エル・ロイ」と神を呼びます。それは彼女の経験を表現した神の呼び名です。しかしその神が、イエス・エルの神、アブラハムとサラの神、主と同じであることは言うまでもありません。ただここでのハガルの言葉に少し分りにくいところがあります。今日はそのままにしておきます。

ハガルは主の命令にしたがってサラのもとに戻ります。アブラハムとサラは、これを、主の命令によるものとして、心から迎え入れたと思います。

戻ったハガルは男の子を産みます。ハガルが産んだ子にイシュマエルと名付けたのはアブラハムです。アブラハムの子と認知されます。アブラハムはイシュマエルに跡継ぎとして期待をかけたようです(一七・一八)。次にサラに生まれるイサクとのやっかいな関係は、少し先のことになります。

さて新約聖書は、サラを、アブラハムと同じように、不妊の自分でも、歳をとっていても、神の約束を信じ、神の恵みにあずかった人として描いています(ヘブライ一・一一)。また夫アブラハムに仕えた妻としても賞賛され、「サラの娘」(一ペトロ三・六)と呼ばれることを励みとせよとも勧められています。今日の箇所にあったようなこと、それはみな人生の途中のことです。失敗も、恥ずかしいこともたくさんあります。しかし本当の問題は、人が最後まで、信仰に生きることです。サラが、その一人の模範としての女性であることは確かなことです。